

「天文学との連携にもとづく考古学・古代史学研究法の構築」
第01回 研究ミーティング (2019年6月29日)

「星の民俗誌の向こうに」

天文班・高田裕行 (国立天文台 天文情報センター 出版室)

●人類学とのコラボ

○「アジアの星」国際プロジェクト

・2009年 IYA2009 (世界天文年)

アジアの天体や宇宙にまつわる神話・伝説をアジア諸国の協力で集めて出版。

(海部宣男・後藤 明・吉田二美・北尾浩一・茨木孝雄・今野利秋・古屋昌美・宮地竹史・
日下部展彦・川越至桜／高田)

・2010年 姉妹書籍「日本の星めぐり」出版プロジェクトスタート
→日本の天文民俗誌を集成 (製作中) →最終章のまとめ記事★資料 a

・2014年 『アジアの星物語』日本語版刊行

<http://www.astronomy2009.jp/ja/project/asian/publication/book.html>



○「天文学と人類学の融合」研究会 (南山大学人類学研究所・後藤先生)

・2016年2月 (01回公開シンポジウム)

海部さん講演: 「アジアの人々が見た星空と宇宙観」

吉田さん: パネルディスカッション・パネラー

・2017年3月 (02回公開シンポジウム)

「人はいかにして時を知り、季節を愛でるのか」

谷川清隆さん講演: 「文明の属地性の天文学的側面に関連して」

高田: まとめコメント



・2018年3月 (03回公開シンポジウム)

「それぞれの大地、それぞれの宇宙」

関口和寛さん講演: 「技術の進歩と宇宙観の変遷」

高田: まとめコメント→[次ページ](#)



■「それぞれの大地、それぞれの宇宙」 高田まともコメント抜粋

- ① 私は編集者なので、大づかみに印象とか、あるいは本を作るときにこれはどういう目次立てにすればいいかというような視点で、今日の皆さんの議論を伺って、少しまとめてみたいと思います。
- ② そもそも私がなぜ今ここにいるかということですが、私は今、日本に古くから伝わる星に関する名前や信仰や文芸などの紹介を目的にした本を作っています。西洋の星の名前とか星座は皆さんよくご存じで、ギリシャやローマの神話の登場人物などが星座になっているのですが、日本の星の名前は非常に乱雑というか、いろいろなものがごちゃごちゃ混じっています。
- ③ 例えば、今日の議論で出てきたヤマアテのための時計代わりとしての星とか、単に「蟹の目」という和名があって、ちょうど蟹の目が2つ並んでいるようすをイメージしてそのまま名前にしただけとか、あるいは、これは中国から来た名前ですが、織女、牽牛とか、さまざまです。それはなぜなのか、分類してみようということで、少し天文学から離れて、こういう星の文化といったものに関心を持って参加させていただいています。
- ④ 今日さまざまに議論があったのですが、まず、天体そのものをきちんと押さえておくことが重要です。例えば、太陽、月、惑星と、それに対して星座をつくる星は全然違って、星座をつくっている、要するに星空にある星というのは非常に遠くにある太陽なので、例えば1万年ぐらいの期間だと、見た目には相互の位置を変えません。だから、これはかなり安定した環境情報、パターンとして存在していて、その背景上を、太陽、あるいは月、惑星が周期的に動く。われわれは、そういう自然現象を見て、認識し、意味付けて、例えば神話にしたり、暦にしたり、実用的な漁労のツールとして方向を定める、あるいは航海のためのスターナビゲーターにするとか、そんな運用をしています。
- ⑤ だから、そもそも利用の前に、星の明るさ、あるいは色、配置をどう捉えているのかを押さえることが必要なのかなと思っています。単純な図像としての天体の情報ですね。
- ⑥ 次に、その見え方です。今日面白かったのは戸田さんの熱帯雨林のお話で、確かに、砂漠で何の障害もなく全天の星空が見えるところと熱帯雨林で星空がほんの少ししか見えないところでは、おそらくコスモロジーは違うだろうというのは分かります。そういう空間的な前景情報の差異による背景の星空の見え方の違いが1つあると思います。
- ⑦ それから、後半、こういう意味のお話がたくさん出てきたのですが、時間の変化で星空情報がどう捉えられているのか。そういう時間と空間の2つの分類で比較してみるとということが重要だと思います。

⑧ それを踏まえた上で、意味付けのプロセスで、例えば実用的に暦を作るための材料として天体情報を利用する、あるいは漁労をするための、イカ釣りの時間を測るための時計代わりにする、あるいは、太平洋を横断するための航海の目当てとしての使い方など、いろいろあると思います。それが高じてきて、世界はどうできているのかというコスモロジーの一部を星空に託して、何か神話なり伝承なり物語を伝えていく。そこにはおそらく実用的な情報も読み込まれているので、それを分析するというのは大切な要素なのだと思います。

⑨ さらに進んで、例えば、惑星の運動がそれまではよく分からなくて、たぶん地球が真ん中で星空とともに周りをグルグル回っているのだろうと想像していたけれども、関口さんがお話しされたように、科学的な観測データを集積していくと、そこにある法則性らしきものが出てきて、それをその時代の最先端の数理、論理モデルみたいなものをつなぎ合わせると、かなり科学的な、物理的な宇宙観、コスモロジーを構成できて、それで未来を予言して、実際そのとおりになるので、おそらく科学的な宇宙像はそのパラダイムでは正しいだろうという解釈がなされる。そういうふうに、実用、物語、そして物理の3つの意味付けみたいなものがあるのかなと思いました。

⑩ だから、要素が非常に複雑に絡み合っているもので、何かそれを分析する軸を立てて、大ざっぱに分類して、その分類のマトリクスみたいなものの中で、言われている現象なり言い伝えなりがそれなりに妥当な比較に基づいて解釈されていくと、人類学と天文学の隙間を埋めて、もう少し横断的な総合知みたいなものが出てくるのではないかと思います。以上です。

→マトリクス作ってみました★資料b

●考古学・文献史学とのコラボ

○心理学（脳科学）とのコラボ

→認知科学への拡張

（「我々は何者なのか？」→天文学が明らかにしつつある物質進化の結果としての「何者」回答プロセスと対をなすアプローチ）

●やること

01・どのように見えるのか（天象のふるまいの考証）

02・なぜそのように見えるのか（心象のふるまいの考察）